

寺社縁起の変遷―太平山三吉神社の縁起から―

丸谷 仁美*・嵯峨 彩子*

はじめに

寺院や神社の起源や由来を歴史的観点に立って記述したものを寺社縁起という。多くは文献の体裁にあるものを縁起というが、伝説などの口承文芸や宗教者が行う絵解きなども縁起の範疇に含まれるとされる。

縁起は、寺社の創建から縁起制作時までの出来事ならびに、説話や神仏霊験譚なども交えて記されることが一般的である。奈良時代に大安寺や法隆寺の古縁起が作られて以来、時代とともに多くの縁起が作られた。近世中期になると、寺社参詣が盛んになったのを受けて、各寺社で縁起を簡単にまとめた略縁起が普及し、一枚ものの刷り物や小冊子などにして、参詣者に配布したという^{*)}。

ここでは、太平山三吉神社が所蔵する縁起から、各縁起の比較や変遷について見ていくとともに、各地で伝承されている三吉大神の伝承も触れ、人々の間に太平山信仰がどのように浸透していったかを考えていきたい。

一 太平山三吉神社と寺社縁起の概要

(一) 太平山三吉神社について

太平山三吉神社は、太平山山頂に奥宮、秋田市広面赤沼に里宮を持つ神社であり、大己貴大神・少彦名大神・三吉大神の三神を祀る。江戸時代までの神仏習合下においては修験の大壽院が別当をつとめており、本地仏である薬師如来を祀っていた。太平山三吉神社の記録によれば、少なくとも江戸時代から、大壽院が太平山の奥宮を守護し、以来代々世襲で修験をつとめている。江戸時代には歴代の藩主が祈禱を行った記録が残ることから、

秋田藩との結びつきを伺うことができる^{*)}。明治元年以降の神仏分離政策により太平山三吉神社となり、昭和二十一年(一九四六)までは県社とされた。現在分社が北日本各地やブラジル・サンパウロにあり、幅広い地域の人々から信仰を集めている。

江戸時代までは太平山山頂の奥宮のみを社殿としていたが、八代藩主佐竹義敦が造った雪見御殿の場所に、慶応三年(一八六七)、十二代藩主義堯が設けた太平山遙拝所が建立されたのが、現在秋田市広面赤沼にある里宮であり、人々から「赤沼の三吉さん」として親しまれている。なお、太平山三吉神社では、大壽院が復飾して田村姓を名乗り、現在も田村氏が代々宮司を務めている。

(二) 縁起の構成

太平山三吉神社に残されている縁起は寛政三年(一七九一)から明治四十年(一九〇七)までに作られた七本で、すべて卷子装である。ここでは縁起の内容について時代順に見ていくことにしたい。

縁起に書かれている寺社の由緒については、概ね次のような内容にまとめることができる。

ア 太平山は修験の開祖である役行者の開いた霊山であり、本地仏は薬師如来である。

イ 大同二年(八〇七)、坂上田村麻呂が太平山に籠って蝦夷征伐のための祈願を行い、戦いに勝利した。その際、神像ならびに鏑矢を山に奉納し、山宝とした。

ウ 慈覚大師円仁が太平山に大伽藍を創建したが、長い年月が建ち、騒乱

*秋田県立博物館

や賊に荒らされて、太平山の堂宇は衰廃した。

エ 太平の城主、藤原三吉が大井太郎ならびに五郎に陥れられ、太平山にこもり人々に崇りをなした。それを恐れた人々が太平山に藤原三吉を祀り、三吉を十二神将の列に加えたところ、災害が止み、人々に平安が訪れた。

オ 慶応四年の戊辰戦争の際、神主が太平山に籠り戦勝祈願をおこなったところ、八月十二日に鷗が山頂にあらわれた。十七日、十二代秋田藩主佐竹義堯が代参を行い、九月十六日、奥羽鎮撫総督九條道孝が遥拝所で祈願を行ったところ、戦に勝利することができた。
カ 戦場では、両脇に大砲を抱えた神が現れ、多くの敵を倒した。そして、敵の撃つ弾は味方には当たらなかった。

二 各縁起について

こうした構成を踏まえ、各縁起について内容を整理していきたい。

凡例

- ・旧字・異体字は通常の字体に改め、文章中改行を加えている。
- ・削除された文字は左に「リ」と傍書してこれを示した。
- ・文中右に（ ）で示した部分は注として示した部分である。
- ・判読不能な文字は□で示し、文字数が不明な場合は「リ」とした。

(一) 縁起一 本紙 一六cm×一一〇cm

〔翻刻〕

(裏書) 「寛政三年亥七月吉日 別当大壽院恵光」

(「政」 「亥」 「恵光」 は異筆で、元の字の上に記す)

太平山略縁起

太平山略縁起

抑太平山大権現ト申奉ルハ、御本地ハ則薬師如来ニテ、役行者開闢ノ靈山ナリ。其後大同二年田村將軍、北狄調伏ノ勅ヲ奉ハリ当国ニ下向ノ刻ミ、当山ニ深ク祈誓ヲ籠玉ヒシニ、不思議ノ御告ヲ蒙リ荒夷悪鬼ノ類タケヒを不日ニ退除シ、直チニ凱歌ガイカヲ唱、國中ヲ平治シ玉ヒシハ、偏ニ当山ノ擁護ニ依テ也。其節安置シ玉ヒシ本尊御鏡佛并ニ鍔根等、今ニ伝テ山宝トス。

其次慈覚大師登山シテ、大ニ殿堂伽藍ヲ創建シ、一山興隆ノ美ヲ輝シ玉ヒシカ、星霜推移リ或ハ兵乱ノ為ニ堂宇ヲ焼却セラレ、或ハ悪徒ノ為ニ賊害セラレテ、衆徒等四方ニ散落シ、一山年久シク衰廢セリ。

爰ニ太平ノ城主鶴壽藤原三吉天姓性仁愛ニシテ頗郷民ヲ撫育セラシニ、大井太良同五良ト心ヲ合セ三吉ノ所領ヲ押掠セント企、数度合戦ヲ催セシニ、三吉勇ナリト雖、寡ヲ以衆ニ敵シ難ク、終ニ居城ヲ遁レテ太平山ノ幽谷ニ隠レ、一念ノ恨鬼形ト變ジテ大井ノ一族ヲ亡シ、猶國中ニ縦横セシカバ国民大ニ恐怖ヲナシ、依テ三吉大権現ト鎮祭シ、十二神将ノ列ニ加ヒ奉リシカバ、災害忽止ミ、利生誠ニ新ナリ。本地ハ則宮毘羅大将ニテ座マセハ、鎮国安民ノ誓護際キキモナク、勸善懲惡ノ神威測ルベカサルモノ也。其利生ノ新タナル事、諸人ノ知トコロナレハ、之ヲ略ス。一度当山ニ歩ヲ運フ輩ハ、諸願成就ノ加被ヲ蒙ランコト、何ノ疑カアラント云爾

当山略縁起畢

(挿入紙) 「文化七年 恵光」

〔解説〕この縁起は、太平山三吉神社の縁起のうち、現状で年号の確認できるところの中で一番古いものである。縁起を書いた恵光なる人物は、十一代大壽院北雲で、後に恵光と名乗り、文政四年(一八二二)に死去している。(※)

縁起は ア ↓ イ ↓ ウ ↓ エ の順で構成されており、比較的簡潔にまとめられている印象を受けるが、アからウまでの内容と、エの、

藤原三吉の内容とが、ほぼ同じ分量で記されている。藤原三吉という人物については目長崎城主だという説や、山谷の館主（目長崎・山谷はいずれも秋田市太平にある集落名）とする説などがあり、はっきりしたことはわかっていない。^{*4}

(二) 縁起二 本紙 一九・五cm×二三・一cm

〔翻刻〕

太平菩提峰縁起

抑当山の濫觴を尋奉るに、人王四拾代天武天皇御宇白鳳二癸酉四月、役君行者始て入山ましく、嶮岨を躡、葛藟を攀^{（よす）}。絶頂に登て医王善逝を勧請し奉、定慧の二法を顕章して、表裏の両経を開闢し給ふと云々。

其後四十五代聖武天皇御宇、行基大僧正、当国に遊曆ましく、役君の遺蹟を慕ひ、再当山の荊棘を踏開らき、数日篋居ましく、経王書写の夙願を興たまへしに、紫雲東方に鬘鬘、光明赫耀として薬師如来顕現し玉ふ。僧正感涙胆に銘し、則感見の聖容を彫刻し奉、当山の本尊仏となし給ひ、近邑を勧進して新に堂宇を建営し給ふ。

同五十式代平城天皇大同二丁亥歳、田村将軍利仁公、夷狄征伐の勅を奉当藩に下らせ給へしに、夜に大嶽の二鬼国中に縦横し、人民東西に迷惑ふ。将军悲ませたまへ、徒歩して当山に登、悪鬼調伏の祈願を籠させたまへしに、薬師如来忽然として顕われたまひ、親ク善逝の示現を蒙、悪鬼の居栖を識り、不日にして二鬼を退伏し、永災孽を除、国中を平治したまひ、愈当山の靈験を仰木華開耶姫の命を勧請し奉、持念の鏡佛御自筆の名号及鏃の根等を奉納し、鎮護国家の伽藍を造築し、山を太平菩提と名け、寺を大同護国と号し、則香華の資料として、三千畝の菜田を寄付せらるゝと云々。
(割注) 傳に云。時に大同二臘月八日と云々。加旃、慈覺大師打続へて登山ましく、益堂宇を興起し、一山の衆徒を潤色し、八十八箇の伽藍を造営したまへ縑素踵を繼、洪基繁采の靈場となし給ふ。

しかるに領主大井太郎五郎と、藤原三吉と（割注）或鶴寿丸と号ス、数度の鬪戦に勝利なき事を憤り、三吉則幽谷に入て、其靈修神鬼となり縦に賊徒を悩ます。入山のもの是かために絶、僧院はか為に荒廢す。物擲ク星移、或は鬪戦の街となり、神俱を奪掠し、或は兵火のために回祿して、旧記悉焼却す。其後玄光僧都、入山ましく、一山の絶たるを繼、寺宇の廢れたるを興し、鬼神を三吉権現と鎮祭りて十二神將の列に加ひたまへしより以来、妙用日々に新に威嚴年々に隆なり、遠近共に是を仰、尊鄙同是を尚ぶ。嗚呼織悪の衆生を呵し、乱慢の機根を懲さんかため、仮に忍辱の内證を隠し極悪の外相を現し給ふもの歟。

中頃藤沢遊行上人、念仏弘通のため山箆結界の砌、弥陀薬師觀音の三像三身具足の尊容を拜奉、随喜渴仰のあまり当山の恵燈永挑けて三会の曉にすからむ事を誓たまひ、本房を改て大壽院と号せしめたまふ。而して星余押移るに随、末山或は退轉し、或は改宗して蹤蹟唯渺焉たり悠々たる千歳の際本房幸に存して修務未タ曾て懈らず、当山の威徳、遠近に轟々として賽詣目踵を繼聯々たる異験枚挙するに遑あらず。視聽の触るゝ処世以是を信知す故に、爰に省略すと云尔

当山縁起 畢

太平菩提峯正別当 大壽院 寅誌焉

于時天保十二童次辛丑 七月改焉

兼大寿

喜楽院現住龜丸英俊 補焉

〔語釈〕

濫觴 〓 物事の起り・起源

医王善逝 〓 薬師如来の異称

経王 〓 經典中最も優れた貴い者

鬘鬘 〓 雲がたなびくこと

嶮岨 〓 けわしくきりたったがけ

定慧 〓 仏語で禪定と知恵のこと

紫雲 〓 めでたい雲 災孽 〓 わざわい

赫耀 〓 光輝くこと 不日 〓 すぐに

聖容Ⅱ神仏などの貴いものの姿 香華Ⅱ仏前に供える香と花

臘月Ⅱ陰曆十二月 加旃Ⅱしかのみならず

潤色Ⅱ斡旋 縮素Ⅱ僧と俗人

洪基Ⅱ大きな事業の基礎 星移Ⅱ月日が流れること

妙用Ⅱ不思議な作用 すぐれた作用

〔解説〕喜楽院は十一代大壽院北雲の甥英順であり、後に喜楽院英順が大壽院を継いでいる。縁起を記した英俊とは、第十三代大壽院英後のことで、十二代目英順の養子として迎え入れられ、明治二年に復飾し、田村壽と改名している。

内容は概ね、ア ↓ イ ↓ ウ ↓ エの順であるが、慈覚大師よりも前に行基菩薩が既に山頂に堂宇を築いており、歴史をさらにさかのぼらせていることが縁起一と異なっている。その後坂上田村麻呂や慈覚大師も相次いで太平山に堂宇を築いたが、役行者や坂上田村麻呂が入山した年月日などが詳述されており、史実と思わせるような書き方になっている。また、藤原三吉については、戦いに勝利しないために山に籠り悪鬼となったといい、山頂の堂宇が衰退したのは神鬼と化した藤原三吉を恐れて人々が登山しなくなったからであることなど、鬼神と化した三吉の恐ろしい面が強調されている。その容貌も、悪人を罰するために本来の心を隠して恐ろしい形相をしていると記されている。三吉は権現として祀られ、十二神将の列に加えられたことよって、荒ぶる魂が鎮められたとあるように、三吉は薬師如来の眷族として位置づけられている。

この縁起の最後には、藤沢遊行上人が太平山に修行して阿弥陀薬師観音の三尊の姿に出会ったことから、大壽院と名乗って山を祀るようになったと記されている。藤沢上人とは時宗の遊行上人が引退後、相模国藤沢の清浄光寺（遊行寺）の住持となった際の名称であり、大壽院が太平山を祀る由来について触れているものはこの縁起だけである。

(三) 縁起三 本紙 三〇cm×約二二三・五cm

〔翻刻〕

太平山本縁起并三吉権現略伝

抑太平山と申奉るは、薬師弥陀観音三尊和光の勝境にして、役行者草創開闢の靈山なり。其後人皇五拾一代平城天皇の御宇、大同二丁亥歳、田村將軍利仁公北狄調伏の勅を奉け、当国江下向の刻み、当山に深く祈誓を籠玉ひしに、不思議の御告を蒙り、不日にして荒夷悪鬼等を平らけ、国中を平治し玉へしは、偏に当山の擁護に依てなり。其節安置し玉へし、御鏡仏并鍬の根等爾今伝へて山宝とす。

其次、人皇五拾四代仁明天皇の御宇、承和五戊午年、円仁大僧都求法の勅を奉け、遣唐大使左大弁藤原常嗣と共に入唐し玉ひ、長安の都におゐて、義真阿闍梨に逢て両部の大曼荼羅を受、天台止観の骨髓を探り、求法功成て帰朝を促し玉ふ。留唐凡拾年、承和十四丁卯年帰帆を海上に艤し玉へしに、大風俄に起、時浪天に漲、五六日の間東西を失なへ、乗船の衆人術計既に尽て命を円仁に乞ふ。于時円仁大僧都東方に向て誓ての玉わく、我命更に惜むに足らず、唯求る処の法宝空しく海底の屑となり、何を以てか日域の衆生を度せん。又此衆人宿殃若遁難く共、一度本土に帰る事を得せしめ玉へと頻に祈願し玉へしに、不思議や。十二支の甲を着し金剛の鎧に天戟を持玉へし十二の神将忽然として船に出現し玉ふ。円仁問て曰、神将何れの処より来らせ玉ふ。神将異口同音に対玉わく、我々は日本の北に当り靈山あり。名けて太平菩提といふ。絶頂には薬師如来鎮座し玉へ、前嶽は阿弥陀如来鎮座し玉ひ、宝蔵比丘の因位に象り、宝蔵か嶽と号す。又弟子還といふ高嶺に如意輪観音鎮座し玉ふ。此三尊の命を奉け、大徳を守護せんか為に爰に來現せり。更に疑ふ事なかれといふて、白雲に乗して飛去玉ふ。円仁をはしめ満船の人々、感涙膽に銘し、渴仰の頭未だ挙げざる頃に、悪風忽鎮て海上浪穩なり。乃日を経ずして筑紫の国に着船す。円仁帰京の後、海中の不思議を天聴に達し、速に太平山に往詣して仏恩を謝せん

事を乞ふ。

叡感斜ならず、則勅許によつて遥当国に下向し、先東方を臨玉へば、太平山の絶頂より光明赫耀と鬘鬘藥師弥陀觀音の三尊頭れ玉ふ。扱こそ十二神の御告に違わずと、山深く分登玉ふに、五百羅漢の靈像巖石に羅列し、十二神將の威容左右に圍繞し玉ふ。円仁隨喜の涙に咽び、則藥師の尊像を鑄奉り、絶頂に安置し、如意輪觀音の尊像を弟子還山に安じ、宝蔵か嶽に至て見れば石碑あり。銘に曰、大同二年、田村曆利仁、為北狄退治建立之其上に弥陀の種子あり。爰にしんぬ田村將軍経歴の靈山なる事を。則石碑の下を掘に、壹十八歩の弥陀の金像出現し玉ふ。是利仁の守本尊といふ。其外満山の靈窟勝跡筆に述る処にあらず。

中頃永井左近太夫大江廣政といふ大檀那あつて、山門仁王門堂塔伽藍結構を尽すと雖、大檀那左迂已来次第に破壊して、三百餘年の星霜を経、纒（むすか）の祠となんぬ。抑当山は当御城郭の鬼門に当て、度朔山より吹来る悪風藥師威神の力を以、則他方へ吹返し国家鎮護の誓願甚深なるものなり。殊に三吉権現の神威日々新にして諸人の崇敬いふ斗なし。

偕三吉権現の本因を尋奉るに中頃太平寺台の城主に鶴寿丸藤原三吉といふ人あり。頗仁愛を以郷民を撫育せられしに、大井太郎同五郎といふ逆賊共に心を合せ、三吉の所領を掠奪せんと企度合戦を催せしに、三吉勇なりと雖、寡を以衆に敵し難く、城を遁て太平山の幽谷に隠れ、一念の恨鬼形と變して大井の一族を亡し、猶国中に縦横す。（此山より）因茲三吉大権現を鎮祭し、十二神將の列に加奉りしかば災害忽止ミ利（虫種）、「（虫種）」、宮毘羅大将の應作にして当山の守護神なりや勸善懲惡の神威世人の「（虫種）」縁起の趣大概斯の如（以下虫種）「（虫種）」

〔語釈〕

求法（三吉）の教えを求めること

天聽（三吉）天皇がお聞きになること

赫耀（三吉）威徳などが光輝くさま

衆生（三吉）の救済の対象となるもの

叡感（三吉）天皇が感心なさること

満山（三吉）山全体

〔解説〕後半部分、激しい虫喰のため、年代および縁起を記した人物等については不明であるが、藥師如来の功德について書かれていることから、明治時代より以前に書かれた縁起、もしくは明治以前の縁起を原典としたと考えられる。内容はア ↓ イ ↓ ウ ↓ エ の順で記されているが、特にウの部分に詳細に記されている。そこには慈覺大師円仁が遣唐使として長安に派遣され、その帰途嵐に遭遇し、太平山の神に救われたこと、その後、円仁が太平山を訪れた際、藥師阿弥陀觀音の三尊が現れたこと、円仁が鑄造した藥師如来像と如意輪觀音を山頂ならびに弟子還岳に安置し、宝蔵嶽では坂上田村麻呂の守本尊であった金の像が現れたことなど、他の縁起になかった話が記されている。また、この縁起では、山頂の堂宇を築いた人物が円仁ではなく、大江広政となっている。大江広政は、太平地域の城主であった大江氏（後に永井氏）の一族であり、『奥羽永慶軍記』で湊城攻撃の陣営にその名が現れるものの、人物の詳細は不明である。（*5）

〔四〕縁起四 本紙 二五、五cm×二〇二、五cm

〔翻刻〕

太平山之縁起

抑是の太平山神社と申奉るは、祭神大名持命少彦名命座しますて役君小角ノ開闢の靈山なり。（さるを）大同二年癸亥坂上將軍田村曆利仁公、蝦夷征伐の勅を蒙り当国に下向の刻（時）、当山（社）に深く祈誓を籠め給ひしに、御告を蒙り荒夷悪鬼の類（此）を不日にして退除し、直に凱歌を唱へ、国中を平治し給ひしは偏（御イサヲ）に大神の功德（依）に頼（依）てなり。其節安置し玉ひし神靈并鏑矢の根等今に伝へて神室（オヌ）とし、其後永井左近將監大江広政大に社殿を再建し、一山興隆の美を輝かし給ひしに、星霜推移り、或兵乱の為に禍害せられて衆徒等四方に散落（離）し、一山年久しく衰廢せり。

爰に太平の城主鶴寿藤原三吉、天性仁愛にして郷民を撫育（す然るに）せしに大井太良同五郎と心を合（合）、三吉の所領を掠奪せんと企（企）、数度合戦に及（けるに）しに、

三吉勇なりと雖寡を以て衆に敵し難く、終に居城を遁れて太平山の幽谷に隠れ、一念の恨ミ鬼神と変して怨敵を亡し、猶国中に縦横せしかハ、国民大に恐怖をなし。依て三吉大神と鎮祭シ奉りしかハ、災害忍止ミ、功徳シ誠ニ新たなり。武甕槌命の和魂魄に坐しませハ、鎮国安民の誓護天地と共に長く久しく、勸善懲惡の神威測るへからざるものなり。

今茲ニ慶応四年戊辰、勅を奉し奥羽の賊退治の官軍当藩に下り応援の力を盡しと雖、下ハ十二所大館上ハ雄勝平鹿仙北郡河辺まで賊軍押寄来り、発砲兵火昼夜止事なし。然に公命を蒙り、百数十日の間神主山籠井有志の神職、数日の内山上におゐて怨敵退治の御祈禱あり。殊に嶮岨の高山なれば、頂上江鳥獸も固より来らざる処なるに、八月十二日鷗一羽飛来り、神前の鳥居に止り、声を發し飛去りける。是ハ賊徒退治の告なりと祝しぬ。同十七日御代参登山九月十六日、遙拝殿江九條殿左府道孝公御社参、朝敵退治の御祈願有せられ、其日より忽御勝利と成り賊兵退散の驗しあり。右の如く御代参登山の日と九條殿御社参の日と、同十六日十七日にして前後対応せるは、祈願満足朝敵退治の瑞相なりと感ぜざるものなし。

不思議なる哉、神旗処々に連り立ツ、神威を現し大砲を自在に持挟ミ給ひて賊兵を追払へ。妙なる哉、砲丸ハ敵に当り、死る処の賊徒数を知らず。味方ハ劔難矢玉を遁レ、蘇生の思を成す。是則御城三社を始奉り信る処の太平山三吉大神の御神徳なりと人々唱へたりき。其利生の新たなる事、是を以て知るべきなり。されは、一卜度当山に歩みを運ぶ輩ハ、諸願成就の守護を蒙ん事は何の疑かあらんと云爾。

明治元年 戊辰霜月

祠官

田村壽藤原朝臣

英俊 謹写

〔解説〕 題簽に「太平山神社縁起」と記されている。縁起二と同様、大壽

院英俊の記したものであるが、神仏分離令により、神主田村壽と名乗っており、今までの縁起になかった才と力の部分が加えられている。縁起はア ↓ イ ↓ エ と続き、ウの慈覚大師に関する記述は見られず、山頂に堂宇を築いた人物が、縁起三と同様大江広政になっている。また、薬師如来に代わり、「祭神大名持命少彦名命」の名が太平山の神として記されている。三吉大神が鬼神となり、人々に災厄を及ぼすことを人々が恐れて神に祀られるという記述は変わりないものの、従来の縁起にあった、三吉を十二神将の神の一人に加えたという記述が、ここでは戦いの神である武甕槌命の和魂と連座すると書かれている。そして縁起の後半部分はオ ↓ カ と続き、戊辰戦争の出来事で占められるが、三吉大神の靈験とともに、第十二代藩主佐竹義堯や奥羽鎮撫総督九條道孝が祈願に訪れたことが記されており、新政府とのつながりも見えてとれる。

(五) 縁起五 一六 cm × 一九六 cm

〔翻刻〕

太平山靈験略縁起

抑太平山大権現と申奉るハ、登り三里余りの高山にて神靈は薬師尊座祭神の役ノ行者開關の靈山なり。大同二年癸亥、坂上將軍田村曆蝦夷征伐の勅を蒙り、当国に下向の刻ミ、当山に深く祈誓を籠め玉ひしに、不思議の御告を蒙り荒夷惡鬼の類ひを不日に退除し、直に凱歌を唱ひ、国中を平治し給ひしは偏に権現大神の加護功德に頼てなり。其節安置し給ひし神尊并矢の根等今に伝て山宝神とし、其後慈覚大師登山して、大小社殿を(□□□)創建し、一山興隆の美を輝かし給ひしか、星霜推移り或兵乱の為に禍害せられて衆徒等四方に散落し、一山年久しく衰廢せり。

爰に太平の城主鶴寿丸藤原三吉、天性仁愛にして郷民を撫育せしに、大井太良同五郎と心を合、三吉の所領を押掠せんと企、数度合戦に及しに、三吉勇なりと雖、寡を以て衆に敵し難く終に居城を遁れて太平山の幽谷に

隠し、一念の恨ミ鬼神と変して怨敵を亡し、猶国中に縦横せしかは、国民大に恐怖をなし、依て三吉大神と鎮祭し、十二神将の列に加へ奉りしかは、災害忽止ミ利生之誠に新なり。本体是則宮毘羅大将にて坐しませは鎮国安民の誓護、天地と長く久く、勸善懲悪の神威測るへからざるもの也。

今茲に慶応四年戊辰勅を奉し、奥羽の賊退治の官軍当藩に下、応援の力を尽と雖、下八十二処大館上ハ雄勝平鹿仙北郡河辺迄賊軍押寄来り、発砲を日の内山上におゐて、怨敵退治の大護摩御祈祷あり。殊に嶮岨の高山なれば、頂上に鳥獸も固より来らざる処なるに、八月十二日鵬一羽飛来り、神前の鳥居に止り、声を発し飛去りける。是は賊徒退治の告なりと祝しぬ。同十七日、御代參登山九月十六日、遙拜宮殿江九條殿左府公御參詣朝敵退治の御祈願あらせられ、其日より忽御勝利となり賊共退散の驗あり。右の如く御代參登山の日と、九條殿御社參の日と同十六日十七日にして前後対応せるは祈願満足朝敵退治の瑞相なりと感せざる者なし。

不思議なる哉神旗処々に連り立ツ神威を現し、大砲を左右に持挟ミ給ひて賊兵追払へ妙なる哉。砲丸は敵に当り死る処の賊徒数を知らず。味方ハ劔難矢玉を遁し、蘇生の思をなし、是則御城三社を始奉り信る所の太平山三吉大明神の御神徳なりと人々唱たりき。其功德の新なる事、是を以も知るべき也。されは一ト度当山に歩ミを運輩ハ、諸願成就の擁護を蒙ん事、何の疑かあらんと云爾

畢 別当 大壽院 謹写

明治元年
戊辰十二月

神主改名 田村壽

藤原英俊

〔解説〕縁起四の作られた一カ月後の明治元年十二月の縁起である。縁起四と同様、内容はア ↓ イ ↓ ウ ↓ エ ↓ オ ↓ カと続く。

この縁起では、「権現」の横に「大神」、「別当」の横に「神主」と書き加えるなどの訂正が随所に見られるため、本文中では追加された文言を行間に記した。この縁起から、神仏分離政策によつて仏教色の強い内容から神道色の強い内容に縁起を変えていく過程を見ることが出来る。恐らく縁起四よりも早い時期に作られたが、内容を書き改めた日付が縁起四よりも一カ月遅い十二月になったのではないだろうか。

(六) 縁起六 本紙 二二cm×約二〇七cm

〔翻刻〕

〔端裏書〕 祠掌 田村千里 蔵書

太平山神社之縁起

抑是の太平山の神社と申奉るは、祭神大名持命少彦名命にましまして役小角の開闢し給ふ靈山なり。然るに延暦二十年辛巳坂上將軍田村磨蝦夷征伐の勅を蒙り、当国に下向の砌、当社に深く祈誓を籠め給ひしに、御告を蒙り荒夷悪鬼の類を不日にして退除し、直に凱歌を唱へ国中を平治し給ひしは、偏に此大神の御功德に依てなり。其後安置し玉ひし、神靈并鎬矢の根等、今に伝へて神宝とす。

又其後永井左近将監大江広政大に社殿を再建し、一山興隆の美を輝かし給へしに、星霜推移り或は兵乱の為に禍害せられて、衆徒これか為に四方に離散し、一山久しく衰廢に及へり。爰に太平の城主鶴寿丸藤原の三吉、天性仁愛にして郷民を撫育す。然るに大井太郎五郎、三吉の所領を押領せんと数々合戦にそ及けるに、三吉勇なりといへとも寡を以衆に敵し難く、終に居城を通れ太平山の幽谷に隠れ、一念之怨ミ鬼神と変して怨敵を亡し、猶国中に縦横せしかは国民大に恐怖をなす。故に三吉大神と鎮祭り奉りしかバ、災害忽止ミ、神靈誠に新なり。是則鎮国安民の誓護天地と共に、長く久しく勸善懲悪の神威測るへからざるものなり。

今茲に慶応四年戊辰勅を奉し、奥羽違勅の賊徒を退治の為に、官軍当国に下り応援の力を盡すといへとも、下は十二処大館、上は雄勝平鹿仙北三郡河辺郡に至るまで賊軍押来り、砲發兵火昼夜止む時なし。然るに公命を蒙り、百數十日の間、神主山籠、猶有志之神職数日の間、山上に於て怨敵退散の祈祷あり。殊に嶮岨の高山なれば、頂上へは鳥獸も来らざる処なるに、八月十二日の朝鵬一羽飛来り、神前の鳥居に止り、声を發し飛去りけり。こハ賊徒退治の御告なりと。愈信心の思へをなし、丹誠怠らず祈りけり。同十七日（以下本撰）御代参、九月十六日、当山遙拝所へ九條左府道孝公御遙拝ありて、朝敵退治の御祈願ありけるに、其日よりして乍ち御勝利となり、賊徒退散の驗あり。かくの如く御代参登山の日と、九條殿御参詣の日と、同十六十七日の両日にして前後対応せる事、祈願満足朝敵退治の瑞相なりと感せざるものなし。

不思議なるかな神旗処々に連りたち、神威を現し大砲を自在に脇挟み給へて、賊軍を追退たまふ神威靈なるかな。砲丸ハ敵に当り、死する処の賊徒数を知らず。味方ハ劍難矢玉を通れ蘇生の思を成す。是則偏二当太平山三吉大神の神徳なりと人々喝仰の思をなせり。其利生の新なる事、是を以て知るべきなり。然れば一度当山に歩ミを運ふ輩ハ、諸願成就の守護を蒙らん事ゆめ疑ひあるべからすと云爾

〔（以下本撰）〕 鬼卜大獄丸三吉乃神三神二鎮 〔（以下本撰）〕

明治六年五月吉日

羽後国秋田県下東 〔（以下本撰）〕

広面村

神官 田村壽 〔（以下本撰）〕

〔解説〕縁起の所蔵者である田村千里は田村壽の息子で、大壽院時代から数えて第十四代目にあたる。戊辰戦争の時には遙拝殿で数日間不眠で戦勝祈願の祈祷を行ったとされ、まさに縁起の中に書かれた朝敵退治のための祈祷の列に加わった人物である。内容は縁起四とほぼ同様に、ア ↓ イ

↓ エ ↓ オ ↓ カ と続き、ウの社殿を再興した人物が慈覚大師円仁から大江広政に変化している。また坂上田村麻呂の蝦夷征伐の年が大同二年ではなく延暦二十年（八〇一）と記述しているというような多少の相違はあるものの、物語の構成や内容については縁起五と大きな変更はない。

（七）縁起七 本紙 三〇cm × 二一六cm

〔翻刻〕

県社太平山三吉神社縁起

太平山の神社と申し奉るは、祭神太名持命少彦名命にましまして、役小角の開きつる霊山なり。然るに延暦二十年辛巳、坂上將軍田村麿の蝦夷征伐の勅を蒙りて、当国に下向の時当社に深く祈誓を籠め給ひしに、太神の御告を蒙りて荒夷鬼の類を不日にして退除し、直に凱旋し玉へるは偏に此の太神の御功德に依りてなり。当時安置し給ひし神鏡并に鏑矢の根等、今に伝へて神宝とせり。

其後、永井左近將監大江広政、社殿を再築して一座興隆の美を輝かし給ひし後、又兵乱の為に禍害せられ、衆徒之か為に離散し、一山久しく衰廢に及へり。

爰に太平の城主鶴寿丸藤原三吉、天性仁愛にして能く郷民を撫育せり。然るに大井太郎五郎と云ふ者、三吉の所領を押領せんと数々合戦に及びけるに、三吉勇ありと雖も寡を以て衆に敵し難く、終に居城を通れて太平山の幽谷に隠れ、一念の怨み現人神と成り、怨敵を亡して国中に縦横せしかは、国民大に恐怖して、三吉太神と鎮祭し、太平山神社へ合せ祀りしかは、災害忽ち止み、靈験掲焉たり。

慶応四年戊辰、皇使 勅を奉し、奥羽の賊徒を退治の為に、東国に下りて征討の力を尽すと雖も、下は十二所大館、上は雄勝平鹿仙北の三郡及び、河辺郡に至るまで賊軍押し来り、兵火昼夜止む時無し。藩主従三位佐竹義堯公、神主に命じて数十日の間山上に籠り、怨敵退散の祈祷せしめられた

り。

抑も太平山は嶮岨なる高山なれば、頂上へは鳥獸も来らざると所なるに、八月十二日の朝、鵬一羽飛来り、神前の鳥居に止り、三声を発して輩去りけるは、是れ賊徒退治の御告ならむと、愈々丹誠を凝らして祈りけるに、同十七日には藩主の御代官登山あり、九月十六日には当社の遙拝殿へ奥羽鎮撫使総督府九條道孝公御遙拝あり、朝敵退治の御祈願ありけるに、其日よりして乍ち御勝利となり、賊徒退散せり。斯の如く御代参登山の日と、九條殿御参詣の日と、同六十七日の両日にして、当社御祭典の日に前後対応せるは、実に祈願満足朝敵退治の祥瑞なりと感せざる者なかりけり。尚不思議なるは神旗處々の山上に現はれ、又大砲を自在に脇挟み給ひて、賊軍を追伐し給ふ神影を目に拝したる者少からず。又味方には劍槍矢玉を遁れ、或は蘇生の思へを為したるもの甚多し。其神徳の掲焉たること、斯の如し。

然れば一度当山に参拝する輩は、諸願成就の守護を蒙らんこと努々疑ある可からず。

丁未五月十七日拝写

〔解説〕明治四十年の縁起と思われる。他の縁起と異なり、「県社太平山三吉神社縁起 一卷」と墨書された箱に納められている。文言の違いはあるものの、内容については縁起六とほぼ同様である。また、戦いに敗れ、城を逃れた三吉が太平山に籠もり、人々に災いをもたらす内容は変わらないものの、三吉大神は、従来の縁起にあった「鬼神」ではなく、「現人神」と記されている。

この縁起と全く同じ記述が「羽陰温故誌^{*6}」や、深沢多市が平鹿郡沼館町の医師から見せられたという縁起にもみられるため、縁起七はある程度の範囲に普及していたと考えてよいだろう。

三 縁起の変遷と伝説の中の三吉大神

(二) 薬師如来から三吉大神へ

このように、太平山三吉神社の縁起は、ほぼ同じ内容が記されているものの、書かれた年代によって、縁起のどの内容に重きを置いているかが異なっていることがわかる。このことは、神仏分離政策によって縁起から仏教色が除かれ、神道色を強く打ち出さざるを得なかったことが大きく関係しているといえる。また、江戸時代に書かれた縁起と明治時代の縁起とを比べると、江戸時代の方が内容が多岐にわたり、物語性に富んでいることも指摘できる。江戸時代の縁起では、薬師如来の靈験を示す話が多く記され、三吉大神も、薬師如来の眷属である十二神将の一員とされるなど、あくまでも薬師如来を中心として縁起が構成されている。そして、三吉大神は時に人々に災厄をもたらす「鬼神」として書かれ、恐ろしい形相をした、力を持つ神として表現されている。

明治に入ると、縁起の内容は薬師如来の話から、三吉大神の話が中心になる。さきほど、明治元年に書かれた二つの縁起について触れたが、田村泰造『太平山の歴史』に、もうひとつの明治元年に作られた縁起が紹介されている。原文を確認することはできなかったが、内容は縁起四とほぼ同様であり、戊辰戦争での勝利と太平山三吉神社との関わりがより詳しく記される構成になっている^{*8}。

この縁起を含めると、明治元年から六年までに四通りの縁起が作られたことになる。そのうち三本は大壽院英俊(田村壽)によるもので、天保年間に英俊が書き改めた縁起も含めれば、英俊は四本の縁起に関わっているといえる。英俊(田村壽)は太平山への山道を新たに整備し、遙拝所新たに建造して布教に尽力した人物である。田村壽が明治元年に、少なくとも二本の縁起を記したのは、恐らくこの時期の神仏分離政策により、神社への理解を深めてもらうため、縁起を再構成し普及させる必要があったためであろう。

(二) 各地の伝承から

三吉大神の信仰が浸透した時期については定かではないが、現存する資料の中では、太平山三吉神社が所蔵する元禄四年（一六九一）の棟札に「三吉権現」の文字が確認できるため、少なくとも江戸時代の中期頃には三吉大神が信仰されていたことが分かる。

しかしながら、三吉大神が初めから人々の崇敬を集めていたかは定かでない。人見蕉雨が寛政年間に記した『黒甜瑣語』には「太平山に三吉と云へる山獠（やまとこ）ありて、邪心の者を勾引（かどは）し、澗河へはめ殺す。土人は山神のことく思ひて、今に癡女鈍童灯火に鬼を語らふ一助となれり」とあり、勸善懲惡の神とはほど遠い姿が記されている。また、菅江真澄も『月のおろちね』（文化九年）の中で、「この山に三吉といふ神鬼あり（中略）山鬼神サンキチンてふことをもやいふらんかし」と述べている。また真澄は、三吉の超人的な力にあやかるため、太平山に登山して祈願した後、大力を授かった男の話など、三吉に関する伝説についても触れている。

三吉に関する昔話や伝説は、菅江真澄をはじめ、各地に伝えられている。伝説の中では、弱い人々を助けるが、悪者には容赦なく罰を与える。時には、その人だけでなく、家族までも崇り殺してしまうほどの恐ろしい神としても伝えられている。そうかと思えば酒と煙草を好み、力が強く、多くの人々と相撲をとることを好むなど、人間らしい面をもつ神として、人々から「三吉さん」と呼ばれ親しまれた。

三吉さんの登場する話が各地に残されていることについて、宮崎進は、恐らくもともとは別々の登場人物の話であったものが、次第に「三吉」の名で統一されていき、数多くの三吉さんに関する話が生まれたのではないかと指摘している。

三吉大神の伝説が数多く生まれた理由の一つとして、太平山に関する信仰の拡大が挙げられるだろう。現在秋田県内には七百基以上の太平山に關

する石碑が確認でき、石碑に刻まれた年号から、文化年間以降に石碑が建てられるようになったことが分かる。また、江戸時代の終わりから明治時代にかけて太平山に参詣する人々が増え、秋田藩では度々太平山登山に関する禁止令を出すほどであった。各地で太平山講が組織され、一月十七日の山開きの日には「参詣人が登山する事、富士詣の如く」であったという。参詣者の増加に伴い、「三吉さん」の名も人々の間に浸透していき、三吉大神の逸話が各地に伝えられていったと思われる。

三吉大神が戦勝祈願の神としての性格を強く持つようになったのは、戊辰戦争で戦場に現れた三吉大神についての噂話が広まったからであろう。明治元年に書かれた縁起には数ヶ月前の戊辰戦争での出来事が語られ、大壽院と新政府との深い結びつきを示唆した後、三吉大神の伝説が書かれている。両脇に大砲を抱えて戦場に現れた三吉大神の話が、いつ、どのように伝わったかは定かではないが、県南部を中心に伝えられ、明治の初め頃には評判であったという。この伝説に伴い、大砲を持つ三吉大神の絵姿が出版され、販売された。また、出陣前には多くの人が赤沼の遙拝所へ参詣し、砲弾などが奉納されたという。

明治時代以降の縁起は、こうした時代の風潮を捉えて作られたものであろう。神仏分離政策により、従来の信仰形態を変更せざるを得なくなった時、新政府とのつながりを示し、また薬師如来に代る神として三吉大神が縁起の中核をなすようになったのは、三吉大神が人々に親しまれていたということが影響したと思われる。

縁起の中で三吉大神は、荒ぶる神という面から、味方を勝利に導く神という面が強調されていく。明治時代以降、日本が富国強兵への道を進んでいく中で、戊辰戦争で味方に奇跡的な勝利をもたらし、敵を容赦なく討ち取った三吉大神の力強さは、当時の時代が必要としていた神の姿であったのではないだろうか。そして、三吉大神の記された縁起が印刷され、配布されることにより、各地に三吉大神と太平山の信仰が広まっていったと思われる。

こうした戦勝祈願の神としての三吉大神の姿は、太平洋戦争中にも、県内外で伝えられていた。太平洋戦争中、神々が戦地に赴いた話は各地に残されているが、秋田県でも、三吉大神に供えていた煙管や草履がなくなつたために出征したのだらうという噂がたつた話が、湯沢市岩崎町や横手市浅舞地方に伝えられている^(*)。また、自ら戦いに赴くだけでなく、弾除けの神としても三吉大神は信仰されていた。山形県新庄市では、太平洋戦争中、徴兵検査や、出征した夫や子どもが無事を祈つて「三吉さん」と呼ばれる太平山の石碑に参詣する人が数多くいたといひ、新潟県出羽郡朝日村関口では、三吉様の石碑に参詣すれば戦争から無事帰還できるとされ、三吉大神の縁日には多くの参詣者が訪れた。そしてこの集落は、三吉大神を祀っているために、昔から戦死者の少ないところであると評判であった^(*)という。

結びにかえて

太平山三吉神社の縁起について、時代毎に整理を行ってきた。江戸時代の縁起は薬師如来を中心とした仏教色の濃い説話が中心であったが、神仏分離政策以降、三吉大神の偉業を伝える内容に変わっていったこと、その背景には人々の間に伝わった、「三吉さん」についての伝説があったことなどについて述べてきた。

昔話研究の先駆者であった佐々木喜善は、「三吉神ほど、種々雑多なお姿になって、お国のため我田のために成れかしと、つとめられた、其の形跡と、人々の心の中に、色々と変つた姿で生き働られた其の跡の多い神様が無かつた、否珍しかつた」と述べている^(*)。伝説の中の三吉大神は、小さな子供や老人など変幻自在に姿を変え、時に人間らしい面を見せる「三吉さん」として親しまれている。こうした三吉大神の姿が各地で語られるようになったことは、人々の間に伝えられた伝説と、縁起の普及とが両輪となってその一助を担っていたと思われる。縁起はその時代ごとに、時代

に即した姿で度々作り変えられている。そこには口承伝承や各地の物語などが史実とともに巧みに織り込まれ、文字資料として残された。縁起と、口承伝承とが互いに影響しあいつつ変化していき、多様な性格を持った三吉大神が生まれ、かつ人々から信仰を集めてきたと思われる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、資料提供ならびに神社の沿革について太平山三吉神社田村泰教氏ならびに原田憲幸氏より多大なる御協力ならびに御教示をいただいた。また、縁起の翻刻については当館歴史部門の新堀道生氏に協力いただいた。深く御礼申し上げます。

- 1 徳田和夫「縁起」(『日本民俗大辞典』一九九九年) 二二七頁～二一八頁
- 2 太平山三吉神社「日記」に佐竹藩主が祈禱に訪れた記述がみられる。
- 3 大壽院の系図については「田村略系図」(太平山三吉神社蔵)を参照した。
- 4 宮崎進「三吉信仰の民俗学的研究」(『出羽路』十八号 一九六三年) 一九頁
- 5 『秋田市史』第十四巻 文芸・芸能編 一九九七年 二一九頁
- 6 「羽陰温故誌」第九冊(『第三期新秋田叢書(三)』一九七七年) 一七一頁～一七三頁
- 7 深沢多市「我が村の歴史」第十号 大正十三年二月十八日(森本彌吉編『郷土の先覚 深澤多市作品集』二〇一八年) 二一八頁～二一九頁
- 8 田村泰造『太平山の歴史』(太平山三吉神社総本宮 一九八〇年) 三十七頁～三十九頁
- 9 人見蕉雨「黒甜瑣語」(『人見蕉雨集』第一冊 一九六八年) 二六〇頁～二六一頁
- 10 菅江真澄『月のおろちね』(『菅江真澄全集』四 一九七三年) 三一七頁
- 11 三吉の伝説では、「稲庭」の地名の由来になった話や、煙草の煙で敵

- を倒した話などが伝えられている。
- 12 注4 二十四頁
- 13 『秋田藩町触集下』 一九七三年 三七九頁 四一一頁 四三九頁
四八五頁 五〇四頁
- 14 注6 一七一頁
- 15 石井忠行 「伊頭園茶話」 三の巻 (『新秋田叢書』(七) 一九七一年)
二〇〇頁。なお、伊頭園茶話二十六の巻には、戦場に無地の白旗が多
くあがり、しばらくして敵方へ大砲が撃ち込まれ、大勢の敵が戦死し
た話書かれている (『新秋田叢書』(十一) 一九七二年 一六五頁)。
- 16 深沢多市 「我が村の歴史」 第九号 大正十二年二月十八日 (注7)
一九三頁
- 17 注15 『新秋田叢書』(七) 二〇〇頁
- 18 『民間伝承』 三巻二号 民間伝承の会 一九三七年 十八頁
- 19 『新庄市史 新庄市史別巻民俗編』 二〇〇六年 三四四頁
- 20 佐藤和彦 「太平山三吉大神」 (『高志路』 三四四号 二〇〇二年) 十五頁
- 21 佐々木喜善 「秋田の三吉さん」 (『秋田郷土叢書』 一九三四年) 九十八
頁